

複合動詞「～切る」における 文法化の過程についての一試案

志賀 里美

[キーワード：①複合動詞 ②文法化 ③意味派生 ④後項動詞「切る」
⑤数量と構文的特徴]

1. はじめに

文法化とは、ホッパー・トラウゴット（2003）によると、「語彙項目や語彙構造が、ある言語の文脈の中で文法的な機能を果たすようになる過程で、いったん文法化が進むと、一層文法的な機能を果たす語に変化しつづける過程である。」と述べられている。

複合動詞の共時的な研究の場合、意味の異なりやアスペクト形式を持っているとき「この複合動詞は文法化している」と言うことがある。つまり、意味の違いだけで文法化と言われる。

確かに、「～切る」の場合、「肉を食べ切った」と言えば、アスペクト的意味を有し、補助動詞的な意味となり、完遂という文法的機能を持つため、文法化と言っていいだろう。だが一方で、このような時、意味派生とどこが違うのか、意味派生と捉えるだけではないのか、という指摘もある。

では、複合動詞において、意味派生と文法化という境目はどのように考えればいだろうか。もし、文法化していると言うならば、意味以外に何らかの形式的違いが見られるのではないだろうか。

そこで本稿では、複合動詞、特に「動詞の連用形+切る」を対象に、意味の異なりだけではなく、数量と構文的特徴、具体的には、出現数や前項動詞のバリエーションと、可能形式や否定形式、副詞の用法、を共時的に考察することにより、複合動詞の文法化を客観的に判断できる可能性を示す。

2. 先行研究

複合動詞の研究は種々あるが、表現機能と文法機能の変化における関連性を共時的な視点から体系的に述べたものは、管見の限り、田辺(1996)、三宅(2005)ぐらいである。

田辺(1996:9)は、「文法化と判別するには、何らかの文法上の変化の証明が必要である。」と述べ、「～こむ」「～ぬく」「～きる」「～あげ/～あがる」を対象に、文法上の変化について考察している。

その結果、複合動詞後項の文法化は、文法化するにつれ、①自動詞・他動詞の接合制約が薄れ、両者が結び付くことが可能となり、前項動詞の自他に従うようになること、②その動詞が保有していた動作性が弱まり、性状化していくことを指摘し、複合動詞が文法化している際の一つの指標を示している。

三宅(2005:73)は、「文法化の認定のためには、意味的な側面と形態・統語的な側面の両方をふまえ、そして、絶対的ではないが、指標となるような認定基準を複数、設定する必要がある」と文法化認定のための指標を設定する必要性を述べている。そして、内容語と機能語間のカテゴリーの連続性に着目し、文法化と見なせる現象を再検討したのち、どのような指標が有効かを示唆している。複合動詞以外の種々の現象も取り上げているが、複合動詞については「～出す」を例に挙げ、意味的な側面と「が」と「の」の交替が認定基準になることを明らかにしている。

複合動詞はこれまで、意味的な側面のみで文法化しているということが言われてきた。しかし、意味的な側面からだけでは、意味派生との違いがぼやけてしまい、明確にはならない。

本稿では、文法化と認定するための指標として、両者が指摘したもの以外にはどのようなものがあるかということをしサーチクエストとし、「～切る」の場合は、文法化しているときには、

①出現数と前項動詞との共起数が異なる：数量的な側面

②可能形式や否定形式、副詞的用法という特徴が見られる：構文的な側面

が有効であることを示し、他の複合動詞研究にも応用できる可能性を示唆したい。

3. データ抽出・分析方法及びその結果

3.1 データの抽出方法と分析方法

まず、「～切る」の用例抽出には、国立国語研究所の『現代書き言葉均衡コーパス』コアデータ¹⁾(以下、『BCCWJ コア』と記す)を使用した。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)とは、国立国語研究所が開発した現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスで、約1億語収録されており、現在日本語について入手可能な唯一の大規模な均衡コーパスである。対象は、出版物として刊行された現代日本語の書き言葉、新聞や、雑誌や書籍、白書などである。今回使用した『BCCWJ コア』はそのうちの①書籍、②雑誌、③新聞、④白書、⑤Yahoo!知恵袋、⑥Yahoo!ブログの中から合計約100万語を抽出し、人手のチェックを経て解析精度を高めたデータである。かなり限られたデータだが、ここで得られたデータは母語話者の使用実態の縮図として見るができるため、今回のデータとして使用した。

次に、「～切る」の意味を、辞書等に掲載されている本動詞「切る」

の意味と杉村(2008)の意味分類をもとに、①「切断」②「終結」③「完遂」④「極限」⑤「一語化」の5つに分類にした。

『日本国語大辞典 第二版』によると、「切る」の意味は、大きく分けて4つある。

- 〔一〕 つながっているもの、続いているものなどを断つ。また、付いているものを離す。
- 〔二〕 物事に区切りをつける。
- 〔三〕 きわだつような動作をする。
- 〔四〕 動詞の連用形に付けて補助動詞として用いる。

この〔一〕の意味を本動詞「切る」の原義とし、「切る」の意味がそのまま残っているものを①「切断」とした。

(1) 「彼は肉を噛み切った。」(作例)

(2) 「うしろ髪をひかれる思いがあったが、それをたちきるように、ふりかえることなく、途中から駆けるように歩いた。」(抽出例)

「噛み切る」は「噛んで切る」、「断ち切る」は「(気持ちを)二つに分けて切る」のように本動詞「切る」の「切断」の意味を有している。このようなものを①「切断」に分類した。

②「終結」は、事態の継続の切断を表すもので、『日本国語大辞典 第二版』では、本動詞「切る」の〔二〕の意味が残っているものと考えられる。

(3) 「彼は彼女への思いをきっぱりと思い切った。」(作例)

(4) 「衆参補選、統一地方選ともに原則として午後八時に締め切られ、都内の一部の区を除き即日開票される。」(抽出例)

(3)は「思う」という動作を途中で切断しており、(4)は(もっと続けてもいいが)午後8時でその行為を終結させている。

③「完遂」は、最後までその行為が行われる意である。その行為が途中で終わるのではなく、一連の行為が完結するため②「終結」とはことなり、<全部><最後まで>と置き換え可能なものをここに分類した。

(5) 「彼は嫌いな肉を食べ切った。」(作例)

(6) 「岸田今日子さんも、立松和平さんも、永六輔さんも、ああ、もう書ききれない。」(抽出例)

(5) は肉を全部食べたことを意味し、(6) はたくさんの人の名前を書きたいのだが、最後まで全部書けないことを意味している。このようなものを③「完遂」とした。

④「極限」は、状態や行為が限界に達し、それ以上進めたくとも継続することができない意を表すもので、〈とても〉〈十二分に〉の意味を表す。

(7) 「私は仕事をたくさんして、疲れ切った。」(作例)

(8) 「そのとき、閉め切った木戸が押し破られ、濁流が押し寄せた。」(抽出例)

(7) は「疲れている」という状態が極限にまで達し、とても疲れていることを意味し、(8) は、「戸を閉めている」のだが、それが、それ以上は閉められないぐらいびったりと閉まっている様を表している。これらを④に分類した。

しかし、③「完遂」と④「極限」の分類が判定つかないものもあった。例えば、

(9) 「広告・消費低迷続くSARSの実態やイラク戦争後の影響がつかみきれないのも今年の特徴だ。」(抽出例)

この「掴み切る」は、いくつかの実態や影響があり、その全てが掴めているとき、つまり、SARSの実態やイラク戦争後の影響が全て掴めているときは③「完遂」と取れるが、SARSの実態やイラク戦争後の影響全て掴めているのだが、それ以上プラスアルファの出来事が実はあって、それはまだつかめていないようなときには、④「極限」に分類できる。図示すると、図1・2のようになる。



図1 ③「完遂」と判断したとき



図2 ④「極限」と判断したとき

同様に、

(10)「話しかたでごはんのこととか毎日のこととかをきくことはわかりきっている。」(抽出例)

の「分かり切る」も、いくつかの事柄があり、そのうちの全てが分かっている場合には③「完遂」と取れるが、全て内容が分かっているが、それ以上に分かっていることがある場合には④「極限」と取れる。これらの違いは動詞の動作性、状態性に関ることであると考えられる。

このように③「完遂」と④「極限」の分類が判定つかないものもあり、それは、「③⇔④」もしくは、「③/④」と表した。

⑤「一語化」は、前項動詞(以下V1)、後項動詞(以下V2)ともに本動詞の意味を失い、他の意味を担っているものことである。

(11)「最下位だった馬がゴール直前で差し切った。」(作例)

(12)「中一の子供ですが、部活に入って張り切っています。」(抽出例)

(11)「差し切る」は「他の馬を追い抜いて勝つこと」ことを意味し、「差す」「切る」の意味がともに失われている。

また、(12)の「張り切る」は「何かをしようという気力が充実している」という意味になっており、「張る」「切る」それぞれの本動詞の意味を有さず、新たな意味になっている。このようにV1、V2ともに本動詞の意味を有さず、1語で新たな意味をもったもの、つまり1語で新しい単語と認定されるものを⑤「一語化」とした。

以上をまとめると表1のようになる。

表1 「～切る」の意味分類

分類	意味	例
①切断	物を切る	彼は肉を <u>噛み切った</u> 。
②終結	事態の継続の切断	彼は彼女への思いをきっぱりと <u>思い切った</u> 。
③完遂	行為が最後まで行われた	彼は嫌いな肉を <u>食べ切った</u> 。
↑ ↓		私はまだ今年の景気予測を <u>掴み切れていない</u> 。 私はまだ <u>死に切れない</u> 。
④極限	状態や行為が極限まで達し、それ以上は進まない	私は仕事をたくさんして、 <u>疲れ切った</u> 。
⑤一語化	新たな意味になっているもの	彼は張り <u>切って</u> 仕事をしている。

以上、表1の5つの意味分類を設定したうえで、それぞれの単語のみの判断ではなく、文脈の中で意味分類を行った。

その後、①～⑤の意味分類によって、出現数や前項動詞のバリエーション、構文的特徴にどのような違いが現れるかという観点から分析を行った。

3.2 データ結果

以下が上記の手順により得たデータである。

表2 『BCCWJ コア』における「～切る」の出現数

異なり語数	66
延べ語数	163

『BCCWJ コア』の中、「～切る」という複合動詞は、163例見られた。そして、その異なり語数は、66語だった。

その163例を抽出した文脈とともに①～⑤の意味に分類したところ、表3の結果が得られた。

表3 意味分類の数

	①切断	②終結	③完遂	↔	④極限	⑤一語化	合計
異なり語数	1	2	41	7	7	9	67
延べ語数	2	8	72	10	15	56	163

延べ語数では163例中、①「切断」: 2例、②「終結」: 8例、③「完遂」: 72例、③/④: 10例、④「極限」: 15例、⑤「一語化」: 56例であった。

また、異なり語数で集計したところ、①「切断」: 1語、②「終結」: 2語、③「完遂」: 41語、③/④: 7語、④「極限」: 7語となった。「合計」が表1と異なる(表2は、異なり語数の合計が66だが、表3では67となっている)のは、文脈により③⑤両方の意味を持つ語があったためである。

(13)「十・二十四～十一・二十二)環境が変わるとき。運の波に乗り切れるかが幸運の鍵。」

(14)「そのためには、6月を十二勝7敗で乗り切りたいところ。」

(13)は、「運命の波に乗り、そのまま乗り終ることができる」という意味になるため、③の意味だが、(14)は、「困難(危険)な状態を、なんとか自力で切り抜ける」の意味のため⑤の意味と判断し、③⑤両方にカウントしている。そのため、67例と表2の結果の異なり語数より1例多くなっている。

4. 考察



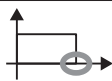
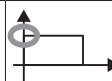
4.1 意味派生と「漂白」

まず、意味派生について少し触れたい。文文化の一現象として、「漂白」(bleaching)というものがある。P.J.ホッパー E.C.トラウゴット(2003: 109,114)によると、「漂白」とは、「意味内容の喪失を伴う過程」のことであり、また、「語彙的な意味がなくなり他の意味が加わる過程が文文化の典型である、と仮説を立てることができる。」と述べている。つ

まり、本動詞「切る」の意味が全くなくなってしまう場合、意味派生も「漂白」として見ることができるのである。

表4を見ていただきたい。下記の表4は、『BCCWJ コア』で抽出された複合動詞がどの意味に分類されているかを①～⑤の分類で示し、その下に、『BCCWJ コア』から抽出した例（異なり語数）を載せたものである。更にその上には、意味の変化について、図と「本義」「転義」という言葉を付し、意味分類と漂白との関係を示した。

表4 「～切る」の意味分類と漂白の関係性

本義 ←						→ 転義
						
	①切断	②終結	③完遂		④極限	⑤一語化
1	断ち切る	打ち切る	乗り切る	掴み切る	耐え切る	乗り切る
2		締め切る	言い切る	乾き切る	疲れ切る	思い切る
3			逃げ切る	成り切る	腐り切る	踏み切る
4			出し切る	締め切る	閉め切る	割り切る
5			押し切る	分かり切る	伸び切る	張り切る
6			食べ切る	抑え切る	腐敗し切る	見切る
7			数え切る	死に切る	困り切る	仕切る
8			売り切る			振り切る
9			守り切る			やり切る
10			書き切る			
11			使い切る			
12			飲み切る			
13			支え切る			
14			上り切る			
15			纏め切る			
16			拭い切る			
17			焼き切る			
18			浸り切る			
19			吐き切る			
20			ごまかし切る			
21			入り切る			
22			取り切る			
23			拱り切る			
24			掲載し切る			
25			捉え切る			
26			処置し切る			
27			伝え切る			
28			対応し切る			
29			渡り切る			
30			曲がり切る			
31			埋め切る			
32			配り切る			
33			賄い切る			
34			抜け切る			
35			貸し切る			
36			避け切る			
37			捨て切る			
38			勝ち切る			
39			し切る			
40			待ち切る			
41			怠け切る			

では、ここから「～切る」の意味派生と漂白の関係を見ていこう。

「～切る」は、①「切断」のときには本動詞「切る」の意味、②「終結」のときもその事態の継続を切断の意味であるため、本動詞「切る」の意味内容を喪失しているとは言えず、意味上、文法化しているとはいえない。だが、③「完遂」④「極限」の場合はもはや「切断」の意味は有しておらず、「切る」という語彙的な意味がなくなり、他の〈全部〉〈最後まで〉のような「完遂」や〈十二分に〉という「極限」という意味が加わっているため、文法化していると言える。つまり、意味分類からは、表4の②と③の間に引かれている縦のラインから左側は文法化していないもの、右側が文法化しているものに分けられる。

⑤「一語化」をどうとるかとは問題だが、文法化を「語彙項目や語彙構造が、ある言語の文脈の中で文法的な機能を果たすようになる過程」と定義するならば、⑤「一語化」したものは、もはや文法機能を有さず、新たな意味を持った独立した語のため、別枠で捉えなくてはならないだろう。

本動詞「切る」の意味の有無で②と③を境に文法化しているかどうかの意味上分けられると述べたが、ここで注意しておきたいことが、全く意味的な繋がりが無いわけではないという点である。本動詞「切る」の意味の有無は、②から③、③から③/④を経て④へとシフトし、「切る」という意味の「漂白」が起こっていると考えられるのである。それが、表4の①～⑤の意味の上に付した図で表している部分である。③「完遂」と④「極限」の上にある図は、杉村(2008)をもとに作成したものである。

まず、①「切断」のときには、何か対象物である物（「肉を噛み切る」の場合は肉）を切断する。そして、②「終結」のときには、「思いをきっぱりと思い切った」という切断される対象物が動作に変化し、そこから、「肉を食べ切った」という場合には、もはや、肉を切断する意味ではなくなる。さらに行為の切断という②「終結」の意味から、行為が最後まで行われたというアスペクトへとシフトし、③「完遂」の意味へと移行

している。その際に、杉村（2008：73）は、「文脈によって物事を諦めずにやり通すという意味を付随させる」ことが起きることを指摘している。

どのようなことか詳しく説明するため、図3を示す。図3も、杉村（2008：74-75）の図がもととなっている。③「完遂」④「極限」の連続性をより分かりやすくするために、表4上の③「完遂」と④「極限」の図を合わせた。そして、さらに下記に視点の移動がどのように変化したかも記した。縦軸は（達成）量、横軸は時間を表している。

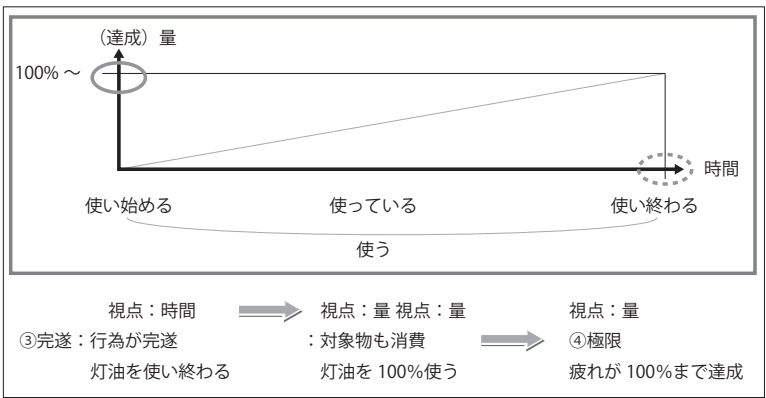


図3 「～切る」視点の移動

では、文脈により、なぜ、物事を諦めずにやり通すという意味が付与されるのか、また、③「完遂」から④「極限」への意味の移行がどのように起こっているのかについて説明しよう。

例えば、「灯油を使い切る」というのは、「使う」という行為の「使い終わった」局面を切断し、「灯油が使い終わる」という行為の完遂を表している。このとき、視点は時間に焦点が当てられている。だが、もう一方のベクトルである（達成）量²⁾のほうに目を移せば、対象物を全て消費した、「灯油が無くなった」ことを意味する。そのため、文脈により「物事を諦めずにやり通すという意味」（「灯油を全て使ったのだ」

という「達成感・満足感³⁾」を含意させる。

また、④「極限」の意味も同じ図で説明したい。本来「切る」は「一つのを2つ以上に切断する」という意味を表す語で動作性を表す語であるため、「使った結果、もう存在しない」という状態性を表すことは困難である。しかし、視点が（達成）量に移行し、「灯油を使い切る」が文脈により「達成感・満足感」というモーダルの意味を含意したことにより、「使った結果、もう存在しない」といった状態性が言えるようになる。通常、「～切る」は動作性が強い動詞であるため、複合動詞になったとしても、前項動詞には「疲れる」といった状態性の動詞は来ないことが予測でき、「疲れ切る」という言い方は出てこないはずである。だが、「～切る」は「対象物を消費する」という用法があることから、「100%の量に達する」という意味があると類推され、疲れが100%まで達成した場合は、「疲れ切った」という表現、つまり、④「極限」の意味が発生し、「疲れが十二分に・とてもある」という極限用法へと派生していったと考えられるのである。

文法化の過程でどのような意味が加わるかということについて、ホッパー・トラウゴット（2003：114）は①「比較的で抽象的で、特に時や役割関係（つまり、文法に関係した意味）の表現に関するものが多い。」②「もともとの文脈で最も際立ったものであることが多い」ことを指摘している。

「～切る」の場合も同様に、際立った「切断」という意味が、「時」という「アスペクト形式」に用いられ、量の消費から「達成感・満足感」が含意され、そこからさらに状態性という抽象的な意味に繋がっていったのではないかと考えられる。

このように、意味が「漂白」していることから「～切る」は文法化が進行していると分かる。だが、この判断は主観的である感も拭えない。そこで、次に客観的に見い出せる違いの指標について探っていく。

4.2 意味分類と出現数

ここでは、意味分類と出現数について考察してみたい。

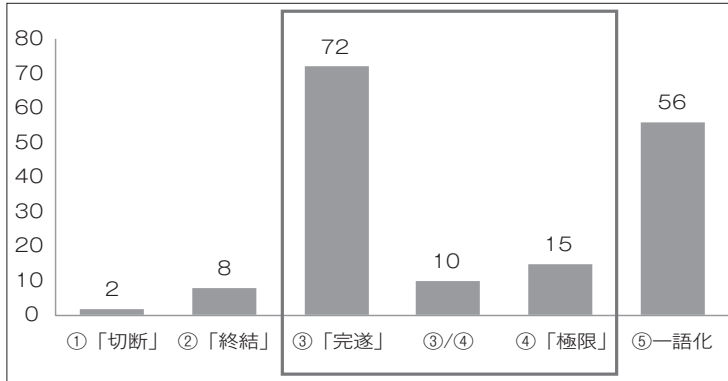


図4 「～切る」意味別の出現数

図4は、表3の延べ語数の部分を図にしたもので、『BCCWJ コア』で出現した「～切る」の例を意味別に図で表したものである。四角い枠で囲った③、③/④、④、は、4.1で述べた、意味上文法化しているものを示す。

この結果を見ると、明らかに、意味により使用頻度に差があることがわかる。③「完遂」の使用例が72例と一番多く、本動詞「切る」の意味が残っている「切断」の例が2例と最も少ない。そして、⑤「一語化」した例が56例あり、かなり多く使用されているのも特徴的である。

また、文法化という観点から、①意味上文法化していない部分、②文法化している部分、③一語化している部分、のように3つに分けて考えると、文法化している部分での使用が最も多い。『BCCWJ コア』は限られたデータではあるが、日本語母語話者の使用実態が反映されているデータである。このことから、文法化しているもののほうが日本語母語話者の使用頻度が高い可能性が伺える。

なぜ、文法化しているもののほうが、日本語母語話者の使用頻度が高

くなるのかというと、普通、文法的機能を有さない語よりも文法的機能を有する語のほうが使用頻度が高いと推測できるからである。

名詞は物の一つ一つに名称を付けなければならず、また動詞は個々の動作について意味を細かく付与しなければ言いたいことが上手に伝達できない。そのため、使用頻度を見た際には、どうしても延べ語数より異なり語数が多くなる傾向にある。だが、文法的機能というのは、ある程度形式が決まっているため、文法的機能を有している語のほうが異なり語数が少なく、反対に延べ語数が増えると考えられる。

このように考えると、今回、「～切る」の意味の出現数が、文法化していない語よりも、文法化しているもののほうが高かったということは、文法化している証左であると考えられ、言い換えれば、使用頻度が多いもののほうが文法的機能を有している可能性が高いと言えることになるのである。

では、⑤「一語化」が2番目に多い理由はどう考えたらいいだろうか。それは、もはや複合動詞「～切る」は、本動詞「切る」の意味が「漂白」され、文法化された意味の使用頻度の増加とともに、新たな意味を獲得し始めているためだと考えられないだろうか。

文法化というと通時的に考察しなければ追えないという考えがあるように思うが、共時的な見方であっても、文法化の進行度などの類推が可能である。以上のように、意味別に日本語母語話者の使用頻度を考察することも、文法化を客観的に見るためのひとつの指標になり得ると言えるのではないだろうか。

4.3 意味分類と前項動詞のバリエーション

4.2で意味分類と出現数について触れたが、今度は、前項動詞のバリエーションの多さと文法化について考えてみたい。

前項動詞のバリエーションが多いか少ないか⁴⁾を考察する理由は、種々の前項動詞に前接する語は、より文法化している可能性が高いと考

えられるためである。

「切る」という動詞は本来「切断」の意味で、動作性の強い動詞である。そのため、複合動詞になる場合でも動作性のものとしか結びつかないと考えられる。例えば、①「切断」の意味の場合には、どのように切断するのかという「切る」様態を詳細に言うことになり、「肉を噛み切る」「肉をそぎ切る」のように動作動詞と共起するが、状態性を表す動詞「疲れる」や「腐る」とは共起できない。もし、状態性のものと共起する場合には、「～切る」の意味が変化する。つまり、①「切断」の意味のときには、動作性の強い動詞としか共起できないという制約が生まれる。

また、「締め切る」「打ち切る」のような②「終結」の場合、事態の継続の終結を表す。このときの前項動詞「締める」「打つ」は、①切断の前項動詞よりは多少動作性が低くなる。

さらに文法化が進むと、「～切る」は状態性の強い「疲れる」や「耐える」などの動詞とも共起し、「状態や行為が限界に達し、それ以上進まないこと」を意味するようになる。

このように、「～切る」が文法化し、機能語化することにより、結果として種々の語と共起しているのである。そのため、前項動詞との共起が多い、すなわち前項動詞のバリエーションが多ければ、機能語化しており、文法化が客観的に捉えられると考えられるのである。

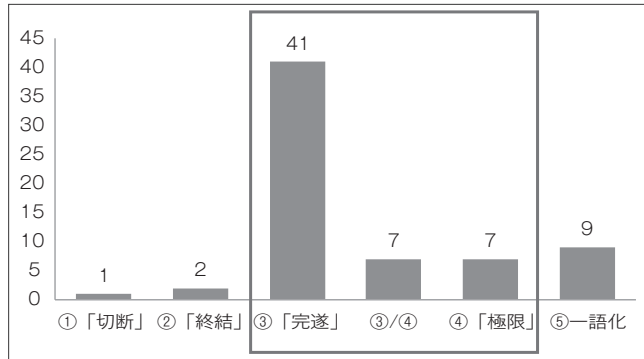


図5 「～切る」と共起する前項動詞のバリエーション

図5は、「～切る」に前接する前項動詞の出現数（異なり語数）である。枠の部分が文法化した部分であるが、枠内のほうが枠外よりも前項動詞のバリエーションが多いことが分かる。また、⑤「一語化」したものは、出現数、つまり延べ語数は多いのだが、前接する前項動詞のバリエーションは少ない。これも、文法化しているものは種々の動詞と共起できるが、文法機能を有さない語は、結合度が高い分、固有の意味を保有しているため、共起できるものが限られている証左となろう。

4.4 意味分類とその他の特徴的な用法

最後に、「～切る」に見られるその他の特徴的な用法として、①可能の否定形式、②副詞化したもの、について見ていきたい。

4.4.1 可能の否定形式

「～切る」が可能の否定形式と結びつきやすいことは、以前より田辺（1996：7）や姫野（1999：173）で指摘されている。

表5 意味分類別可能形式と否定形式

	①切断	②終結	③完遂	③/④	④極限	⑤一語化	合計
可能○	0	0	37	4	4	9	54
可能×	2	8	35	6	11	47	109
可能合計数	2	8	72	10	15	56	163
否定○	0	0	35	5	4	6	50
否定×	2	8	37	5	11	50	113
否定合計数	2	8	72	10	15	56	163

表5は、可能形式と否定形式について出現したものを「○」、出現しなかったものを「×」で示したものである。

例えば①「切断」は、

(15) 「それから舌を、磨り減らない青銅が根本からすっぱり断ち切り、その銚は顎の底のわきから外へつき出たのに、」

(16) 「うしろ髪をひかれる思いがあったが、それをたちきるように、ふりかえることなく、途中から駆けるように歩いた。」

のように出現したため、「可能○：0」「可能×：2」「否定○：0」「否定×：2」となっている。

今回の調査では、「～切る」が可能形式もしくは、否定形式とともに使用される割合は、それぞれ3割程度だった。

だが、可能の否定形式での使用をみると、可能で使用される場合は、否定形式で用いられることが多く、反対に、可能形式でない場合は、否定形式でも用いられにくいという相関性が見られた。それを分かりやすくするために、図6を掲載する。

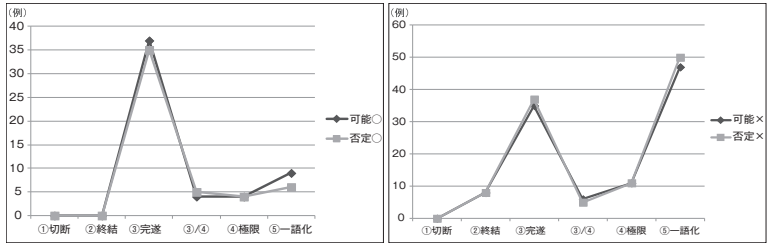


図6 可能形式と否定形式の相関性

この図は、左側の図が「～切る」が可能形式・否定形式で出現した数を折れ線グラフにしたもので、右側の図が「～切る」が可能形式・否定形式で出現しなかった数を折れ線グラフにしたものである。

左の図を見ると、⑤「一語化」の部分を除き、ほぼ重なっている。つまり、可能形式で使用されている場合には、否定形式になっている。

同様に、右の図を見ると、③「完遂」、③/④、④「極限」の部分は線が重なっている。つまり、可能で使用されないときには、否定でも使用されていない。

そして、文法化との関係で見てみると、両図の③「完遂」、③/④、④「極限」の部分の重なりが多いことから、文法化している意味のほうが、可能の否定形式で 사용되는割合が高くなることが分かる。

続いて、下記の図7を見てもらいたい。こちらの図は、意味分類した際の可能形式と否定形式の出現数の割合を示したものである。

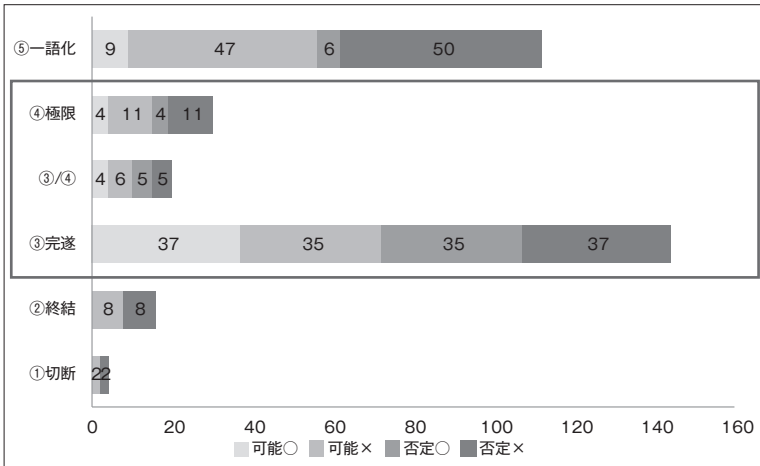


図7 意味分類別可能形式と否定形式

図7を見ると、本動詞「切る」の意味が残っている①②の意味のときには可能形式・否定形式、ともに使用がないのだが、③「完遂」の意味で使用されるときは、どの意味も均等に使用されている。また③/④の中間のものも同様の傾向が見られ、④⑤の意味になるにつれ、また、可能形式と否定形式が減少しているのである。

もちろん、可能形式や否定形式を使用するのは文脈上の選択であって、文法化とどのような関係があるのかと思われるかもしれない。だが、「～切る」が文法化した意味の場合、「満足感・達成感」や、「十二分に・とても」といったモーダル的な意味を含意している。そのため、意志が関係する可能形式や否定形式と共起することが多いのではないだろうか。その結果、文法化した意味のときには、可能の否定形式が多く用いられ、強い気持ちを強調していると考えられる。

4.4.2 副詞化したもの

また、もう一つの特徴として、副詞としての使用が顕著な語がある。それは「思い切る」である。

表6 「思い切る」の出現数と副詞的用法

	出現数	副詞的用法
思い切る	12	9

この表は、今回の調査で得られた「思い切る」の出現数とその出現数のうちいくつが副詞的用法（「思い切って」）で使用されているかを示した表である。

「思い切って」は12例中、9例が(17)(18)のような副詞的用法で使用されており、3例は(19)～(21)のように他の用法であった。

(17)「思い切って大きな病院で一度レントゲンとって貰った方がいいのでは？」

(18)「思い切ってたまったエッセイをそのまま送った。」

(19)「折々に書いたエッセイをまとめたいという思いはずっと持っていたが、なかなか思い切ることができなかった。」

(20)「なんという思い切った信頼の示し方でしょう。」

(21)「十五社、市場で喧伝されている問題企業に産業再生委が思い切ったメスを入れ、産業再編の具体像を示す」

「思い切る」が意味分類の中のどこに分類されているかを見てみると、⑤「一語化」したものである。では、⑤「一語化」したものは、副詞的に用いられることが多いのだろうか。

①「切断」の意味の「断ち切る」や②「終結」の「打ち切る」「締め切る」は、内省で作例しても副詞的用法が作り出せない。

だが、⑤「語彙化」したものを考えてみると、半分程度が副詞として使用できる。⑤「一語化」に出現した複合動詞が副詞化できるかどうか

か内省テストした結果を表7に示す。許容出来ると判定した場合には、「○」、出来ないと判定した場合には「×」とした。その結果、9語中、4語が副詞化できた。

③「完遂」の意味を有するものはたいてい副詞として使用するのには難しいが、④「極限」の意味を持つ場合は「困り切って」「疲れ切って」のように使用できるものが多くなる。

表7 ⑤「一語化」に出現した複合動詞の副詞化許容度

	副詞化できるか	
乗り切る	乗り切って	×
思い切る	思い切って	○
踏み切る	踏み切って	×
割り切る	割り切って	○
張り切る	張り切って	○
見切る	見切って	×
仕切る	仕切って	×
振り切る	振り切って	○
やり切る	やり切って	×

これらのことから、文法化が進んだり、語彙化したりするにつれ、また別の意味が付与されることで新しい品詞も獲得できるようになると考えられる。つまり、意味だけではなく、副詞化できるかどうかを確認することにより、一語化したものかどうか客観的に判定できるものもある。

5. おわりに

以上、「～切る」について、『BCCWJ コア』からデータを抽出したのち、

意味分類をし、出現数や前項動詞との共起関係、そして、可能形式・否定形式や副詞的に使用されるかどうか、という種々の観点から、文法化を客観的に考察することを試みた。

その結果、従来のように意味分類だけではなく、文法化している場合には、何らかの形式的な異なりが見られることが判明し、意味派生と機能語化している部分を客観的に示せ、文法化と認定するための指標として有効である可能性が見えてきた。

しかし、今回は『BCCWJ コア』という限られたデータから抽出された例をもとに考察を行っており、文法化を客観的に示すためには更に文法的機能について、例えば格関係などにも目を向けていく必要がある。また、他の後項動詞との比較や本動詞との通時的な比較なども必要であろう。これは今後の課題としたい。

付記

本稿は、2012年11月「対照言語行動学研究会 第10回記念」のポスター発表「BCCWJ『Yahoo!知恵袋』『Yahoo!ブログ』における複合動詞『～切る』の文法化現象」を基に、データを取り直し、再考察したものです。研究会で多くの方々がコメントを下さったおかげで論文化できました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 今回使用したデータは2013年9月に抽出したデータである。
- 2) 杉村(2008)では、「量」と言っており、「達成量」は筆者が用いた言葉である。
- 3) これも筆者が用いた言葉である。
- 4) 例えば、「～切る」というのは、「断ち切る」「打ち切る」「食べ切る」のように「切る」の前に種々の語が前接するが、「貯める」は「*断ち貯める」「*打ち貯める」とは言えず、「食べ貯める」のように「食べる」などのわずかな語としか共起しないため、前項動詞のバリエーションが少ない。

参考文献

杉村泰(2008)「複合動詞『～切る』の意味について」言語文化研究叢書V7

名古屋大学大学院交際言語文化研究科

田辺和子 (1996) 「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」日本女子大学紀要 文学部第45号

姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化－内容語と機能語の連続性をめぐって－」『日本語の研究』第1巻3号

P.J.ホッパー E.C.トラウゴット (2003) 『文法化』(訳者 日野資成)九州大学出版会

The process of grammaticalization in the Japanese compound verb "-*kiru*"

Satomi SHIGA

The purpose of this study is to investigate the Japanese compound verb '-*kiru*' from its frequency of appearance and its syntactic features. First, I extract '-*kiru*' from BCCWJ(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese). Next I classify the meanings of '-*kiru*' into 1.CUT, 2.END, 3. COMPLETION, 4.LIMIT, 3/4.COMPLETION / LIMIT(Middle of 3 and 4), and 5.SINGLE WORD. As the verb separates from its original meaning, the variation of a preceding clause verb increases, and the degree of co-occurrence with the grammar form also goes up. From this fact, it is suggested that the grammaticalization process of '-*kiru*' develops through its semantic derivation.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程2年)

